矢沢国光さんを追悼する

高原浩之　2024.08.11

矢沢国光さんが亡くなった。50年来の２度の関わり、今しみじみと振り返っている。

(1) １度目の関わりは1968年のブンド第７回大会

1966年に第二次ブンドが結成され(第６回大会)、指導権はマル戦派が握った。矢沢さん(当時は「杉村宗一」)は、機関紙『戦旗』の編集長であったと記憶している。

マル戦派の方針は「生活と権利の実力防衛」。その基礎は「岩田・世界資本主義論」。アメリカ帝国主義の覇権、ドル基軸の国際通貨体制が西ドイツや日本の不均等発展によって動揺し危機に陥っている。しかし、これではベトナム反戦闘争や70年安保闘争は闘えない。

当然、党内闘争になった。関西ブンドは指導権を奪おうと、多くのメンバーが東京に乗り込んだ。私も、学生運動を指導するという任務で上京した。

その時の理論が「過渡期世界論」。中国を根拠地、ベトナムを最前線とするアジアの、アメリカ帝国主義に対する民族解放闘争、それが社会主義革命に発展する。党内闘争には勝利し、第７回大会で指導権を奪い取った。情勢を反映した必然であった。

問題は、そこで、関西ブンドが「内ゲバ」「リンチ」を実行したこと。それが発端で、赤軍派は 1969 年に「７．６事件」を、そしてついには1972年に「連合赤軍事件」を引き起こした。

もし、暴力で分裂に追い詰めたりせず、「過渡期世界論」対「岩田・世界資本主義論」の理論闘争で勝利する道を選択していたら……、と思ってしまう。

それは詮ないこと。しかし、新左翼を毒した「内ゲバ」「リンチ」は必ず総括し清算しなくてはならない。これは今現在も問われている。「連合赤軍事件」だけではない。映画『ゲバルトの杜』批判はいいが、中核派・解放派の「対革マル戦争」も必ず総括しなくてはならない。

(2) 世界資本主義フォーラムが２度目の関わり

その後40年、矢沢さんが主催する世界資本主義フォーラムに参加させてもらった。ブンド第７回大会の「内ゲバ」「リンチ」を謝罪したが、責められることはなかった。

フォーラムは、宇野経済学と「岩田・世界資本主義論」を継承し、現代的に世界資本主義論を構築する、という目的のようであった(宇野経的には「段階論」よりも「現状分析」)。私の問題意識も、21世紀の帝国主義の現状をどう認識するか、であった。

第二次ブンド崩壊後も関西ブンド系は、「資本主義批判」を共有した。その発端は宇野経済学(「原理論」)批判であった。資本家と労働者は労働力商品を売買する対等の関係というのは仮象、実際は生産手段を独占する資本家階級に労働者階級が隷属し搾取されている。これは承知していた。それでもフォーラムでは、多くの学識を得た。勉強になった。

私はこう主張した。1970・80年代、ソ連に続いて中国も、官僚制国家資本主義化した。民族解放・社会主義が、反対物の後発資本主義・帝国主義へ転化した。「北」に対して「南」が不均等発展し、資本主義が世界化し世界が資本主義化した。それがグローバリズムである。ソ連は敗北・崩壊したが、代わって中国がアメリカに挑戦し、帝国主義的覇権闘争となっている。

しかし、納得は得られなかった。アメリカ帝国主義の衰退は認めても、「北」ではなく「南」、中心はアジアであり中国である、とはなかなかいかない。アメリカの覇権を中心にした世界資本主義論、この枠組みからはなかなか抜け出せない。全体的にこんな感じであった。

「ウクライナ=代理戦争」とか「台湾有事=日米の策謀」とか、アメリカ覇権中心の現代世界認識は根強い。それを批判し、後発帝国主義への転化という中国論(ソ連論)を基礎に、米中覇権闘争中心の現代帝国主義論を引き続き主張していきたい。(おわり)